

IV-77 参道型歩行空間の構成に関する研究

東京工業大学 学生会員 岩本 聡
 東京工業大学 正会員 中村良夫
 運輸省 正会員 斎藤 潮

1. 研究の背景と目的

現代の都市において神社の参道ほど様式化された歩行空間は他に例を見ない。そこには技術的に完成度の高い歩行空間のひとつのあり方が示されているといえる。従って参道を純粋にアプローチ空間として捉えその構造を分析することによりデザインの知見を与えることができる。そこでこの研究ではまず神社の参道を歩行空間の一つとして捉えその特性を明らかにし、次にその特性を表現するためにどのような空間構成を設定しているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 歩行空間としての神社の参道の特性

参道を歩くことを「吸引」という型の歩行形態として捉え、他の魅力的な歩行形態（「迷子」・「鑑賞」・「歩行者天国」・「歴訪」の4つの型を挙げた）と比較することによりその特性を明らかにした。比較の項目として「領域と位置」・「歩行目標」・「歩行行動」を設けると吸引型歩行形態の特異性を明らかにすることができ、その中で神社の参道の特徴づけると次のようになる。

a) 単一の目標への到達を意図して造られている b) 重なり合った複数の領域を形成している c) 領域境界線を通過することが儀式化されている

3. 特性と手法の関連づけ

各神社系列の総本社であり今日まで充実した参道を保持する6神社（松尾大社・住吉大社・北野天満宮・水川神社・香取神宮・鹿島神宮）について参道（一の鳥居から拝殿までとする）を構成する主要な6要素（建造物の位置・参道の曲折・参道の勾配・植栽と明暗の変化・敷石・建造物の視野内での大きさ）をデータ化しそこに見られる顕著な傾向を参道設計の手法と見なして2で述べた3つの特性との関連を体系化すると図1になる。

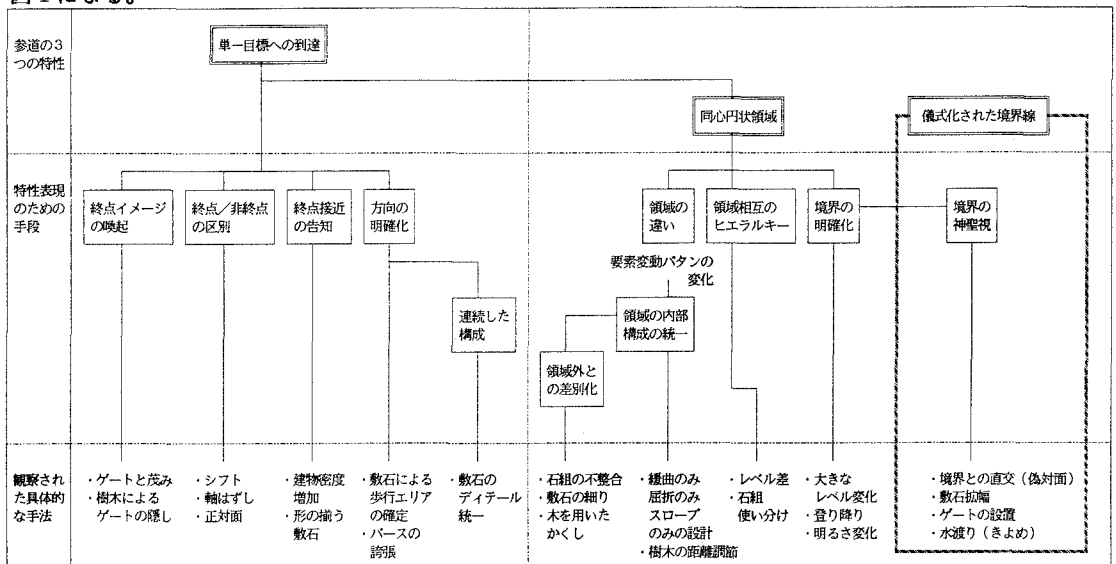


図1 特性と観察された手法との関連

参道の3つの特性は互いに無関係ではなく、単一の目標に到達するための空間であるという特性が同心円状

領域を形成しさらにそこから境界線の通過が儀式化されるという特性が派生する。これら3つの特性のうち他のアプローチ空間には見られず参道のみにおいて観察されるのが「儀式化された境界線通過」であり、そこで用いられる手法は鳥居や楼門などのゲートの設置や「きよめ」のための「水渡り」など儀式性が強い。つまり他の2つの特性を表現するための手法は儀式性を持たないという意味から他のアプローチ空間のデザインに適用できると同時に、参道の空間構成の特徴はその境界線の設計に注目することで指摘できる。

4. 参道を構成する3つの区間

データ化された6要素を神社ごとにまとめると複数の要素が同時に変動を起こし参道の空間構成が変化する地点が6神社中5神社でそれぞれ2つずつ見いだされ、基本的に参道は性質の違う3つの区間で構成されていることが明らかになる。本研究ではこれらを参道起点から順に「流し区間」・「準備区間」・「対面区間」と名づけた。各区間の特徴として「流し区間」では構成要素どうしの同調が見られずそれぞれ小さな範囲で勝手な変動が繰り返され、そこで用いられる手法は参道の先細りが生む距離の錯覚を利用した「パースの誇張」やゲートの先に茂みを配して参道全体あるいは終点のイメージを喚起するなど導入部である第一区間の役割を意識した空間処理が主であり、「準備区間」では各要素が同調して「流し区間」よりも大きな変動が短距離内で起こり、大きなレベル変化を伴う「登り降り」や「水渡り」、樹木の接近による明暗の複雑な調節などの手法が用いられ空間構成が複雑化すること、「対面区間」では多くの要素の数値を0または一定値に固定することで全体的に単調な空間としてメインである本殿との対面のみに意識を集中させるよう設計されていることを挙げる事ができる。また、「流し区間」の最後の部分に「偽対面区間」ともいうべき

「対面区間」に似た空間構成がなされることがあることも指摘できる。これらの大きな3つの区間を視覚的に連結しているのは主に鳥居や楼門などのゲート類でありそれらは「次なる目標」として認識されやすい位置と大きさが調節されている。これに対しそれぞれの区間内部を1つの領域としてまとめているのが主に敷石であり、そのディテールにおいても区間内部での石組の統一や他の区間との使い分けが見られるほか区間の境界線で幅員が広がり次の区間への移行を明示するなど、特に要素のデータの的な変動が激しくゲート相互の視覚的な結び付きが弱まる「準備区間」において果たす役割は大きい。北野天満宮を例として5要素（建造物の視野内での大きさを除く）の重ね図から参道を模式化し各区間で観察される手法を示したのが図2である。

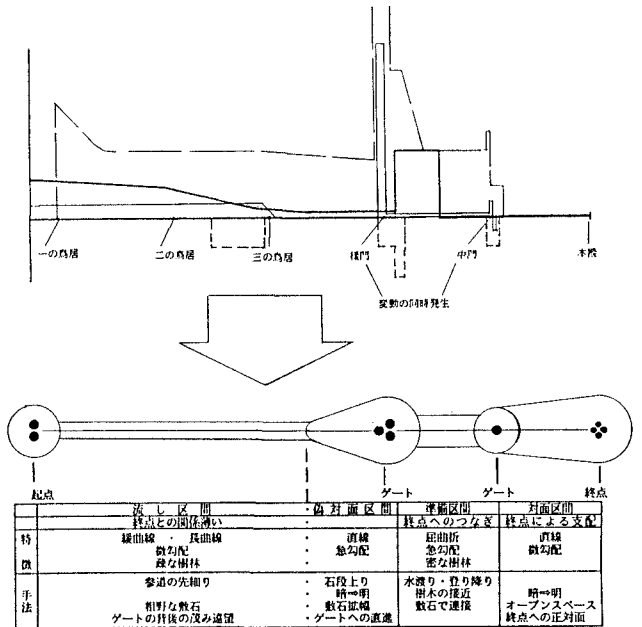


図2 参道模式図－北野天満宮

参道を内部構成の異なる複数の区間で組み上げることでアプローチ空間としては長めである参道において歩行者を終点まで淀みなく導くことができ、区間数を3以上に設定することで終点への距離の告知が可能になるという意味で、図1で「単一目標への到達」「同心円状領域」の表現手法として位置づけた20の手法とともにその他のアプローチ空間への応用が可能であるほか、境界線を儀式化するという手段はよりシンボル性の高い都市内の存在へと至る経路のデザイン方法として用いることができる。しかしながら実際には6神社の参道を分析しただけで終わっており、より多くの参道を研究するほか他のアプローチ空間との比較などをしてさらにその結果を検討する必要がある。